

第12回JIA関西建築家新人賞 審査講評

審査員長 / 長坂 大 Dai Nagasaka

本年度の応募者数は11人。近年の応募者数14、12、19と比較するとやや少なくなっている。

5月22日(火)、JIA近畿支部の会議室にて書類審査を行い、11作品の中から現地審査を行う5作品を選定した。選考に先立ち、この新人賞は人を選ぶ賞であること、その選考のための基本資料は原則として提出された1作品であることを確認した。記名審査では、応募者の他作品等の様々な情報を知ることできるが、選考においてはまず、応募作品に込められた設計趣旨やその背後にある理念を読み解くことに尽力し、その過程において、必要に応じて他の情報を参照した。

6月23日(土)朝、神戸塩屋駅を出発。途中降り出した雨の中5つの作品を見た後、京都市内のカフェにて最終審議を行なった。車中の意見交換を踏まえた上で、この賞は(公社)日本建築家協会が建築家に与える賞であることを再確認して、それぞれ推薦者を挙げたところ、受賞者は即決に近い状態で決まった。

その原因の一端は審査員の構成かもしれない。この審査員会は審査員長が他の2人を選ぶ形式となっている。私はまず自分とは異なる視点を期待して、建築家としてスタンスの異なる榎橋氏、職能が異なるランドスケープデザイナーの吉武氏にお願いした。しかしその一方で、専門家としての社会性について共通言語を持つと思う人を選択することで、審査員会の方向性を明確にしようとした。最後に、私よりも応募者になるべく近い年代の人が、新人賞の選抜にはふさわしいと考えていたように思う。

こうして生まれた審査員会3人の、現地審査後の選択はほぼ議論をすることなく一致したのである。

木村吉成氏にはこの賞にふさわしい総合的な力量が感じられた。「house A/ shop B」には未来に向けての新鮮な眼差しと、建築の本質へと向かう真摯な精神との幸福な出会いがある。日常生活を支える原初的細部と、古典的形式とのコラボレーション。図面で気になっていた2階への入口は、むしろ独創的な場所となっていた。施主と建築家の個性が相殺されることなく、生き生きとした現実世界となった作品である。

出江潤氏が置かれている立場は特異である。著名建築家出江寛氏の子息であるために、作風の類似性とそれに対する本人の意識について直ちに問われる環境にある。

しかし考えてみれば多くの建築家が、あるいは多くの芸術家が、自分の師匠から何かを獲得し何かを捨ててアイデンティティーを獲得してきたのである。少なくとも社会にとって重要なのは、彼の出自ではなく結果としての建築空間である。当初確認したように、審査員は今そこにある作品の現実を評価すればいいという姿勢で現地視察に赴いた。

「佐井寺のハナレ」は、建築の継承と抵抗の不思議な組み合わせが独特の空間の質を生んでいる。作者の逡巡が功を奏したのかもしれない。洗練された素材の扱い、そしてそれとは対比的な試み。増改築であるために空間構成に対する作者の思想を読み取ることが難しかったが、ハナレから庭、母屋の玄関まわりそして蔵の改修状況を拝見して、これからこの国の建築について議論する契機がここにあると実感した。

現地審査に行った他の3作品については、私の原稿に先だって提出された槻橋氏の講評が的確であるためまずこれを参照してほしい。以下若干の追記によって、私が感じた疑問点について少し触れておくことにする。(褒めているだけでは不満が残るでしょう)彼の講評の後にこのコメントがあると思っていたら幸いである。

三宅正浩氏の「ハスノヤネ」は、クライアントの作業室兼ガレージと前面道路との関係が写真よりはるかに好印象であったが、その一方、上階南側端部のテラスまわりは、北側端部の庭あるいは下階のガレージのように、「道」や「南」に対してもう少し開放的であれば、全体構想が明快になったと思う。岸本貴信氏の「売布山手の家」は、斜面住宅地の地形を生かした「庭」と1階の室内空間との関係が期待通り大変魅力的であった。しかし、収納タワーは魅力的なアイデアであるにもかかわらず、この建築の中ではある種の不協和音として感じられた。

石上芳弘氏の「HE10」は、心配していたエントランスの吹き抜けと地形・街区との位置関係は適切であったが、特に「斜線」を契機とする空間造形全般について、より高い訴求力が欲しいと思った。

以上

追伸:このコメントを読まれている建主さま、一部マイナスに聞こえる講評部分はあくまで賞を争う審査のために「建築」について語っているものです。住まいとしての質を疑うものではありませんのでご安心ください。

審査員 / 槻橋 修 Osamu Tsukihashi

今回現地審査に伺った5件はいずれも住宅作品であったが、敷地とクライアントの生活との関係が多様であった。その場所で生活する姿勢の表明としての住まいと、住まいで重ねられる生活の時間との関係について、いずれの作品も建築家が真摯に向き合って実現された豊かなものであり感銘を受けた。

以下、訪れた順に触れていきたい。

「ハスノヤネ」三宅正浩氏

造成された住宅地の縁にあたる細長い敷地に横たわる段丘状の細長いワンルーム。子育てを終えて2人の生活を楽しむ夫婦のゆとりと、完成形とも言えるライフスタイルのリズムが大屋根の元で小気味よく奏でられているすみかであった。2枚に大胆に分割された屋根から入る光がすみか全体を統合する一方で、中央に連続する細い柱と梁のフレームは、構造体としての重さから解放され、家具たちと共に暮らしの補助線の様に振舞っているのが印象的だった。

「売布山手の家」岸本貴信氏

時代を経た住宅団地の一角にひっそりと建つ端正な印象。同型反復する住宅団地の中で、造成面を少し切り下げることで生まれた半地下の様な効果によって隣地との距離感をずらし、1階は開放的でありながらプライベートな広がりをもったピロティのごとき空間。2階はゆったりとしたリビングスペースとコンパクトに収められた諸室によって内向的に構成されており、ロフトの様な親密さを持った空間。開いたピロティと閉じたロフトが上下に直接重なり、それを貫通する吹き抜けに立ち上がる書棚と収納のタワーは、かつて住宅団地が形成された頃の生活像と現在のライフスタイルとの変化を感じさせる。住宅地の家並みに溶け込みながら、新しい家族の暮らし方を見事に実現した作品であった。

「佐井寺のハナレ」出江潤氏

佐井寺の古い屋敷の塀の改築と地山を残した庭園を眺めるハナレの増築。そして母屋の屋根裏をゲストスペースとして改修した作品として視察に赴いた。当初まとまりが無い印象を抱いていたが、塀とハナレから始まり、母屋の屋根裏の改修にとどまらず、メインエントランスや蔵、アプローチ空間など、再生のプロジェクトは少しずつ拡張され続けている。多彩な技巧を操る建築家の生が、この場所に重ねられてきた歴史に新たに編み込まれていく様な印象を受けた。クライアントと建築家をつなぐ作品(プロジェクト)という単純な図式では収まり切らない、古くて新しい建築家のあり方を考えさせられた体験であった。

「HE10」石上芳弘氏

東大阪の高台の住宅地からは西へ向けて大阪全てを見晴らす様なシティビューが得られる。住むことを「住む場所を選ぶこと」と捉えるならば、この作品は他のどの作品よりも若いクライアント家族の喜びにダイレクトに応えたすみかであった。2階のワンルームと広いテラスからは時間と天候によって刻々と変化する絶景を四六時中楽しむことができ、吹き抜けのエントランスを立体的に横断しながら1階の個室群につながる構成は、住まいと家族の笑顔に対して極めて忠実に設計された建築と言える。

「house A/ shop B」木村吉成氏

上賀茂の通りに沿った町屋の敷地に対し、極めて大胆かつ精巧な仕事によって、町屋の空間が永らくとらわれてきた空間的制約に新しい解法を提起している力強い作品であった。単に空間的、構法的な表現にとどまるのではなく、工房・ショップ・カフェを営みながら暮らすという生活のあり方や、町屋型の都市空間が生成し、今後遂げていくであろう変化に対しても開いた態度で建築に挑むという建築家の力量には、先進的でありながら同時に古典的でもある様な揺るぎないスタンスが感じられる。町屋という形式が、そこで営まれる時間と社会的な空間の結晶作用によって生成しているのだということを建築によって示している。

新人賞については審査員長のもと意見を交わし、出江氏と木村氏に決定した。建築家の現在置かれている状況で秀作を生み出す力量はいずれの建築家も賞賛に値するが、建築家の団体であるJIAが出す新人賞として、現状を超えて建築家の在りようを問い、作品を通して建築文化と社会の関係を問い直すという期待を込めて両氏に決定された。

審査員 / 吉武 宗平 Sohei Yoshitake

ランドスケープデザインに関わる立場から、敷地との呼応関係やまちの風景・生活との調和に注目し、書類選考ではそのような点において優れていると思われるものを推した。一方現地審査では、そういった立場的視点にこだわり過ぎず、建築と建築家および住まい手と向きあうことで感じる何かに委ねてみようという思いで審査に臨んだ。

【ハスノヤネ】

不整形の敷地形状から生まれた屋根デザインが明快。なによりガレージとそれに付随する一室をまちに開いた住まい方が魅力的だ。閉塞的になりがちな戸建住宅地にあって、街を面白くする可能性を持つ住宅の在り方・暮らし方に強く惹かれた。元気に暮らすための終の住処、それを超ローコストで実現している。ファイナンシャルプランナーとのユニットというユニークな設計事務所のスタイルにも、真摯な建築家の姿勢を感じた。

【売布山手の家】

雛段型の宅地を1m掘り込むことで、良好な隣地との関係と、包まれるような居心地の良さを生み出している。庭にも意識を凝らしてしっかりと作られた家は、生活と風景がよく馴染んでいて良い。庭に奥行きを与える斜めに差し込まれた鋼製の壁や、共働きの夫婦のためにローメンテにも配慮した植栽の工夫が見てとれる。子供が増えることによる生活様式の変化にもきちんと寄り添う、建築家としての姿勢にも好感を抱いた。

【佐井寺のハナレ】

庭にある紅葉の古木の存在に注目し、ただの塀の改修依頼を「壁と一体化するハナレ」の提案に昇華してしまう発想力。歴史を重ねた庭と家屋の風景の中にあって異彩を放つガラスの箱。空調の効いたその小さな空間で主は日がな一日豊かな時間を過ごすという。母屋は屋根裏の改修にとどまらず、一階の各部や玄関、軒下空間も改修中であつた。その随所に、材料を熟知し職人技を活かしながら独自の表現を追求する建築家の力量が滲み出ている。コストはそれなりに掛かっても、それをよく使いこなす技術と品格を持っており、新人らしからぬ底力を感じた。

【HE10】

ガルバニウム鋼板に覆われたシンプルな形態の家の佇まいが、急峻な地形のまちなみの中に不思議と溶け込んでいる。縦長に開けられた特徴的な窓の2階から、母子がひょっこり顔を出して出迎えてくれた光景が微笑ましく印象的だった。大阪平野を見晴らす2階のリビングが生活の中心となることに徹したプランが明快であり、全体の住宅性能もバランスがよい。親子4人と訪れる友人達の楽しい暮らしがひしひしと伝わってくる。

【houseA/shopB】

京都のいわゆる「ウナギの寝床」型の敷地に、木造シースルーの京都らしからぬ外観の建物。実

は書類選考時にはあまり推していなかったのだが、現地を見てその空間の魅力と建築家の思慮の深さに感服した。工房の様子とストックされた商品が通りの風景となり、覗きこめば通り庭のような空間に商品がひしめき人を誘う。立体的に緩やかにつながる職場と住空間が、住まい手の生活観をよく体現している。建築家がこだわった特殊な構造は、将来の隣地への拡張計画への布石にとどまらず、住まい手が変わってもストックとして構造体が残っていくことへの願いが込められている。社会的職能としての建築家の姿が深く印象に残った。

立地も居住スタイルも建設費用もそれぞれ異なる状況下で、平等に比較評価出来るものではないが、最終的には、現地で肌で感じた「建築の力」、あるいは作品を通して垣間見える「建築家の力」のようなものが、幾分勝ったと思わせてくれたものを最優秀として選定させていただいた。